

る盤石の底より鳴動し、猛烟天を掠め、熱湯迸り出、其凄き事いふ計りなし、是を四方へ寛を以て取て、湯舟へ堪え置なり、浴家二十七軒、三軒の本陣有、又一月中一度長沸する事有て、終日涌出す、然る時は、翌日は終日涌出ざる也、又濱邊に瀧湯とて、夥しく山より流れ落、下に大なる湯舟三に堪ふ、神社あり、走湯權現と申、略中都て温泉の地潮なるはなけれど、硫黄成は鐵器早く錆腐る故に、寺院の口鐘先腐壞す、其甚敷は、上州草津也、浴湯の人至れば、先刀劔を宿に預り、箱に入、能々緘して、還るの日出し與ふ、然らざれば、逗留中に錆て用立ざる程也、予九州の歸路、豊後國府内に至る時、九月五日也、此日此所の市濱の市と満會の日にて、近郷の人夥しく群集す、略中翌日小船をかりて別府へ行けり、笠縫島は磯近くて、棚なし小舟漕行は、古歌の姿を得たり、弓手は四極山海岸に立覆ふ、浦々の風景又珍らし、程なく磯に著て、小坂路を上り下り、とある濱に人の首七ツ八ツ並び見えたり、コハ怪しき事也と、燈を回りく、て、漸く近く見るに、いよ、首也、僧の首も有り、女の首もありて、物いひ笑ふさまなり、餘りにいぶかしければ、道を走りく、頓て其洲崎に至り見れば、各濱の砂を掘穿て支體を埋みたる也、此所に温泉あれども、潮と交りて地上に出ず、故に身を埋めて浸すに、其温暖甚快し、され共潮さしぬれば、海と成故、引汐を考て、斯くの如くす、至て加減よき程なり、頓て出る時は、側に池の如き湯あり、是にて砂土を洗ひ落し、衣服を著して宿へ歸るなり、別府町にも、家毎舟に湯を湛え置り、誠に興覺る業ながら、珍らしく可笑、數十年の旅行の中には、見馴れぬさまの事多かりき、

〔羅山詩集三紀行〕有馬山温泉

我國諸州、多有湯泉、其最著者、攝津之有間、下野之草津、飛驒之湯島、是三處也、有馬湯舊得冷煖之中、而浴者有効、一旦會地震山崩、而后酷熱、觸手如探湯、殆似投鷄卵、而黃白凝結也、故近歲引澗水于寬以注之、始獲浴焉、然其効亦可觀也、按大明曹蕃遊草所載、云遵化之湯泉、臨清之溫泉、甚詳矣、且援王